

英語と他言語の学習における初年次学生の動機づけ： パイロットスタディー

Motivation of the first year students for studying English and other languages: A pilot study

清水明子

Akiko SHIMIZU

1. 初めに

全学共通科目としての語学が導入される以前、家政学部において 1・2 年次の英語は一般に general English と呼ばれる 4 技能を総合的に学ぶ「英語 I」と「英語 II」、そして 2 年次以上の学生には文学を学ぶ「英語 III」、学科ごとに専攻分野に関連した内容を学ぶ「英語 IV」が提供されていた。典型的な履修形式は 1 年次で「英語 I」、「英語 II」、初習外国語 1 科目、そして 2 年次では「英語 III」あるいは「英語 IV」に登録するというものであった。実際、「英語 III」は 7 コマ、「英語 IV」は 3 学科（被服・食物・生活美術）にそれぞれ 2 コマずつ、計 6 コマを毎年開講できるだけの履修者が存在し、多くの学生が少なくとも 2 年次までは何らかの形で英語に触れる機会を持った。

そのような環境の下、2007 年の総合文化研究所の共同研究において、筆者は全国の主な家政系の学部における英語教育の位置づけを検証した結果、英語教育を専攻分野の学習との密接な関係の中で推進する ESP (English for Specific Purposes) が英語を専攻しない学生の興味を高め、かつ語学力向上の有効な手立てであることを確認した。そして、「英語 IV」をその興味を語学学習に直接反映させられる形として評価した（清水、2007）。

全学共通科目への移行後は、家政学部生が個々の興味に応じたテーマを専攻分野の研究と結びつけた形で英語で学ぶ「英語 IV」のような授業はなくなり、科目内容にかかわらず常に他学部の学生とともに学ぶ形式となった。さらに、大多数が 1 年次に卒業要件の 8 単位を取得し、2 年次以降履修可能な「ビジネス英語」などを履修する学生はごく少数にとどまっている。このことから、家政学部生にとっては、以前より語学の位置づけが相対的に低くなっていると察せられる。

専攻分野の異なる学生が共に学ぶクラスにおいて、動機づけの要因とその変化という視点から現在の学習環境について考察することにより、各学生のニーズに即したより効果的な教授法を模索する資料としたい。

2. 動機づけを検証する意義

Deci と Ryan による「内的動機づけ (intrinsic motivation)」と「外的動機づけ (extrinsic motivation)」(Deci & Ryan, 1985) は第二言語習得の研究において頻繁に引用される基礎的研究である。「内的動機づけ」は自己有能感や自己決定感から知的好奇心など、内的報酬に基づく自発的な動機づけを指す。一方、「外的動機づけ」は、知的探究心が満たされる、取り組みの結果が親や教師、友人などから賞賛されるなど、外

部からの評価が動機に影響しているかを調べる見方である。しかし、実際には、これら 2 つの区分に明確に分離できるものではなく、さらに、学習対象に対する興味や憧れ (Gardner, 1985)、学習から得られる結果への期待 (Keller, 1987)、他者とのコミュニケーションの意思 (八島, 2004)、第 2 言語学習の場における理想の自己 (Dörnyei, 2009) など、複雑な要素が絡み合って学習への動機が形成される。

個々の学習者を特徴づける要因の内、適性や学習スタイルが固定したものであるのに比べ、動機づけは、学習ストラテジーとともに、教育的介入により比較的容易に変容すると考えられている (Guilloteaux & Dörnyei, 2008)。それは動機づけの程度と変化が学習成果に大きく影響し得ることを示し、よって動機づけを高めることができれば、学習環境の改善や学習方法の工夫により学習成果をより高めることへの期待が持てると考えられる (Mizuno & Takeuchi, 2008)。大学という学習環境が、学生の専攻分野の学習や日々の活動との関連の中でいかに動機づけに影響を与え、英語学習への取り組みに変化をもたらし得るか学年を追って調査・分析することで、各学生に対するよりきめ細かな学習指導への示唆が得られると考えられる。科目選択の自由度がおそらく高校とは格段に違うと思われる大学という場で学び始めた段階で、学生が語学にどのような向き合い方をしているか、そしてそれぞれの学生がいかなる過程を経て自律的な学習方法を模索していくか、個々の質問の集積が全体像を浮かび上がらせるためには有効な手立てであると考えられる。

3. 調査の目的と方法

(1) 目的

本研究は、所属の異なる 1 年次学生へのアンケート調査を通して、他の外国語学習との関連、所属学部別の意識の違いが存在するか否か、またその具体的内容はどのようなものであるかを検証することを目的とする。今回の調査は複

数年にわたる追跡調査の基礎調査であるが、大学という新たな環境が学習への取り組みに早い段階から何らかの影響を与えているかを検証することを主たる目的とする。

(2) 方法

筆者の担当する全学共通教育科目の「英語 II」を履修する学生のうち、レベル 1 及び 2 の 1 年次学生に対して、前期終了時と後期終了時の 2 回アンケート調査を行い、そのいずれにも回答した 57 名について結果を分析した。

森永 (2009) による学習ストラテジーと学習意欲の相関関係に関するアンケート調査によると、成績下位の学生は教員による親しみやすい雰囲気作りやユーモアに対する評価が高く、一方、成績上位者は学習そのものにより焦点を置く傾向があることが見て取れる。「生徒の学習を真剣に受け止める」、「学習のどんなことについても、いつでも快く学習相談にのることを伝える」の項目が上位群・中位群ではそれぞれ 1 位、2 位となっているが、下位群では 3 位、5 位に位置づけられている。調査対象がアカデミックレベルの高い大学の学生であり、ストラテジーの有効・無効の別なく上位と下位の間にリッカートスケールの平均値では大きな差は見られなかったと森永は結論づけているが、全体に学習意欲の高い学生の間でも成績と動機づけの関連が存在することがうかがえる。全学共通の英語科目の内、1 年次配当の「英語 I」・「英語 II」は、入学時のプレイスメントテストにより 5 段階に分けられる。習熟度の上位 2 レベルの学生は、所属学部に関係なく全般的に学習意欲が高く、自律的な学習の態度がすでに身につけている。よって、英語に苦手意識の強い学生より語学を学習全体の中で明確に位置づけ、その生かし方について意識した学習を心掛けていると推察できる。

第 1 回のアンケートでは、大学入学までの語学の学習歴に続き、英語と英語以外の語学に関する意識を問う質問を、リッカートスケール

と自由記述を組み合わせることで多角的に分析することを試みた。第2回も、学習歴を問う項目以外はすべて第1回と同じ形式の質問をし、数か月という短い期間ではあるが、大学という場での学びを経験することで何らかの意識変化が生じているかを検証した。

4. 結果と考察

(1) 大学入学以前の語学学習歴

半数以上が中学入学前から何らかの形で英語を学んでいたと回答しているが、そのほとんどは英会話スクールや塾に比較的短期間通った例であり、趣味としてあるいは受験準備のためであったことがわかる。また、高校時代に英語以外の言語を学んだという回答が9例あったが、そのうち7例はテレビの語学講座を視聴しての自習であった。このことから、海外での数年の居住経験のある2名を除いては、受験科目の一部として英語を学ぶという、日本における最も一般的と考えられる学習歴をたどってきたと考えられる。

(2) 英語の学習に対する動機づけとその変化

第1回のアンケートでは、英語の重要度をその道具的側面から捉えている学生が多いことがうかがえる。前期の調査では、「かなりそう思う」あるいは「ややそう思う」と回答した学生が、就職活動に有利、外国に行くときに便利という項目でそれぞれ85%を超え、情報収集の幅が広がるという評価も82%に上る。さらに、大学での単位取得、そしてTOEIC・英語検定などのテストで高得点を得ることにつながるという項目でも70%が同様に答えている。一方、友人や親からの賞賛という外的動機づけについては、いずれも学習の強い動機づけにはなっていないことがわかる。専攻の学習へのプラスの影響や母語理解の深まりなど、大学における学習とより密接に関連した項目では評価が分かれた。留学への興味も40%弱の学生が示しているものの、それほどの関心を持たないと回

答した学生もほぼ同数いた。

第2回の調査では、全体として大きな変化は見られなかった。しかし、一部の回答は、今後の学習や生活経験によっては考え方の変化が顕著になる可能性を示唆するものであった。たとえば、外国に行った時に英語ができると便利であるという項目では、「かなりそう思う」が6減、「ややそう思う」が7増となった。他方、「大学の専攻分野の勉強に役立つから」に、「どちらともいえない」との答えが8増となったが、このうち6は「あまりそう思わない」からの移動である。

(3) 英語以外の外国語の学習が与えた影響

調査対象のうち、英語以外の言語を履修している学生が8割の46名に上る。通年科目である英語と違い、「中国語」・「フランス語」・「ドイツ語」は半期で完結するため、前期のみの履修や後期を待って履修開始をする学生も毎年わずかであるが存在する。いずれにしても、卒業要件に英語以外の言語の単位が必要な学部の学生がクラスの大半を占めており、それらの学生は1年次に英語と他言語を並行して学習する環境にある。「他の外国語を学ぶことにより、英語の意欲に変化はありましたか。」との問いには、約3割の回答者が意欲の高まりを感じている。しかし、6割が「変化はない」と答えていることから、現時点では新しい言語の習得が英語の学習に影響を与えるか、またどのような影響であるか、学生により個人差があることが見て取れる。

この質問に続き、外国語学習全体の中で、英語と他の言語をそれぞれどのように捉えているかを8項目の問いにまとめた。ここでは、英語の必要性をより強く感じるようになったとの回答が、「かなり」・「やや」の合計で16から28へと、約4分の1増えた。英語と他言語についての好感や興味を比較する質問では、英語か他言語かの別なく、比較的興味のある状態から「どちらともいえない」への変化が少々見ら

れた。語学学習全般について「意欲が高まった」あるいは「重要性をより強く感じるようになった」という点は、前期から 65%以上がそのように感じており、その考え方は 2 回目のアンケートでもほぼ維持されている。

(4) 外国語学習における今後の展望

アンケートの最後に、大学卒業時の達成目標、そして「10 年後の理想の自分」がどのように仕事や日々の生活に英語をはじめとする外国語を生かしていると思うか、将来への展望を自由に記述してもらい、学生自身の言葉による考え方の変化を検証した。

英語に関しては、「TOEIC で人並みの点を取りたい」、「TOEIC や仏語検定を受けたい」など、多くの学生が卒業時の目標として TOEIC に言及していることから、所属学部別なくこのテストへの関心が高いことがうかがえる。さらに 850 点から 500 点と幅があるものの、具体的目標とする数値を示した者が 46 名中 25 名いることから、TOEIC を将来の仕事に英語を生かす手だての一部としたいという意思が感じられる。しかし、幼稚園教諭や栄養士といった語学力を日常の業務で駆使することが比較的少ない仕事に就くことを希望している学生は、英語を新聞等のメディア情報を得ることや映画鑑賞などに役立つ程度に維持できればよい、あるいは専門の文献を読める語学力を身につけたいなど、専攻分野とその後の生活を視野に置いた回答をする傾向があった。

英語以外の言語については、中国語やフランス語の検定の目標合格級を挙げる学生が約 3 分の 1 いたが、旅行業界や航空業界への就職を希望する学生以外は、3 ～ 4 級といった比較的容易に達成できる目標以上のものは、現時点で描くに至っていないようである。

今後の調査において注視していきたいと思われるのは、一部の学生の記述とその中に見られる変化の有無である。家政学部のある学生は、第 1 回目のアンケートで「(イタリア語とフラ

ンス語を学び始めて) その国にも興味を持つようになった。フランス語の音楽や映画をみるようになった。(英語は) 2 年次までに TOEIC700 点目標。」と、語学についての関心を示してはいたものの、それらを具体的に含んだ自身の将来像についての記述はなかった。しかし、第 2 回では、「(フランス語とイタリア語を学んだことで) 有名な海外ブランドが多いことや、街でその言語をみつけると気づくことが多く」なり、その結果、専攻分野への「興味が深まった。…外資系アパレルブランドに就職したい。」と、語学学習が自身の考え方に与えた影響の大きさを述べている。

また、幼少時にアメリカで数年の居住経験を持つ国際学部の学生は、2 回のアンケートとも親の持つ TOEIC900 点以上のスコアを出せるようになることを当面の目標としていること、しかし英語はあくまで「道具の一部」として考えていると一貫した立場から述べている。

5. まとめ

今回の調査では、全般的には、英語および他の外国語を学ぶことの位置づけや語学学習に対する考え方にそれほど目だった変化は見られなかった。これは、1 年生ということから実際の職場でどのように語学が使われているかについて情報を得たり、思考したりする機会がまだほとんどない環境に学生がいることの表れと考えられる。しかし、自由記述では専攻分野と動機づけに多少の関連もみられた。

清水・松原による経済学部の卒業生に職場での英語使用の頻度と内容を問うた調査では、ドキュメントの読解など、「読む」活動がプレゼンテーションやドキュメント作成よりも頻繁に行われている一方、回答者の多くが今後の課題として「聞く」「話す」を挙げていることが報告されている(清水・松原, 2007)。今後専攻分野の学習がより高度になり、就職など卒業後の進路を意識する段階になって、また自身にとっての「学習」という概念が意味する範囲やレ

ベルが変化し、結果現実的かつ明確な意識を育てていくにつれて、語学への取り組み方もおのずと変わるものと予想される。

学部に関係なく、語学が専攻の学習や進路の開拓に資するものであるとの認識をもたせることができれば、さらなる学習の相乗効果が期待できるであろう。同時に、大学というさまざまな興味と能力を持つ学生が集う場で、専攻から抜け出てより広く学ぶきっかけを、在学中につかんでもらいたいとも考える。各学生の多様な資質と目標に合ったきめ細かな指導が求められていることを念頭に置き、常に最適な学習環境を提供することを日々心掛けた教授法を今後も模索し、研究を継続したい。

引用文献

- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Dörnyei, Z. (2009) The L2 Motivational Self System. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.) *Motivation, Language Identity and the L2 Self* (9-42). Bristol: Multilingual Matters.
- Gardner, R. C. (1985) *Social psychology and second language learning – The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold Publishers.
- Gilloteaux, M.J. & Dörnyei, Z. (2008) Motivating language learners – A classroom-oriented investigation of the effects of motivational strategies on student motivation. *TESOL Quarterly*, 42, 55-77.
- Keller, J.M. (1987) Use of the ARCS motivation model in courseware design. In D.H. Jonassen (Ed.) *Instructional designs for microcomputer courseware* (401-431). New York: Lawrence Erlbaum.
- 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編）（2010）

『成長する英語学習者—学習者要因と自立学習』（大学英語教育学会監修『英語教育学大系』第6巻）、大修館書店。

- 森永弘司（2009）「外国語学習意欲を高める戦略を求めて—Dörnyei の提唱する Motivational Strategies を利用したアンケート調査にもとづいて—」『立命館高等教育研究』、第9号、195-209.
- 清水明子（2007）「ESP 教授法に基づく英語教育の現状と課題」『共立女子大学総合文化研究所紀要』、第13巻、118-125.
- 清水裕子・松原豊彦（2007）「経済学部卒業生の英語使用に関するニーズ分析」『立命館経済学』、第56巻、第3号、485 - 497.
- 寺内 一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島 茂（編）（2010）『21 世紀の ESP：新しい ESP 理論の構築と実践』（大学英語教育学会監修『英語教育学大系』第4巻）、大修館書店。
- 渡辺紀子（2009）「迷える子羊からコミュニティの参加者へ」福井希一・野口ジュディー・渡辺紀子（編）『ESP 的パイリンガルを目指して—大学英語教育の再定義』（180-197）大阪大学出版会。
- 八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点』関西大学出版局。

<付属資料>「英語 II」を履修する 1 年生へのアンケート結果（抄録）

I. 高校卒業までの学習

1. 英語を習い始めた時期

- | | |
|------------------|----|
| a. 中学へ入って初めて習った | 25 |
| b. 中学へ入る前から習っていた | 32 |
| (うち 2 名が帰国子女) | |

b. の場合、学び始めた時期

小学校 5・6 年	10	小学校 3・4 年	9
小学校 1・2 年	5	小学校入学以前	1
その他 (学年記載なし、帰国子女)	7		

2. 学習の内容

- a. 主に学校の授業と受験のための勉強 40
- b. 授業や受験に直接関係のない学習もしていた
(英会話スクール、テレビの語学講座など)

17

b. の場合、学習方法

英会話スクール	12
テレビ・ラジオ・新聞など	6
パーティー	1
ホームステイ	1

3 英語以外の外国語の学習経験の有無

- a. 英語のみ 48
- b. 英語以外の言語も学習した 9

b. の場合、言語名 (学習媒体とその内容)

コリア語 (テレビ - 語学講座、ドラマ)	3
中国語 (テレビ - 語学講座)	2
イタリア語 (テレビ - 語学講座)	2
スペイン語 (テレビ - 語学講座)	2
フランス語 (高校の修学旅行事前指導)	2
広東語 (香港の学校に在学)	2

II. 大学入学後

1. 英語学習における動機

質問 A : 英語の学習をどのようにとらえていますか。あなたにとっての重要度を答えてください。

1. まったくそう思わない
2. あまりそう思わない
3. どちらともいえない
4. ややそう思う
5. かなりそう思う

- a. 卒業のために英語の単位が必要だから
- b. 英語という言語が好きだから
- c. 英語圏の文化を知るため
- d. 英語ができると就職活動に有利だから
- e. TOEIC、TOFL、英検などのテストで高いスコアを得るため
- f. 将来、日常的に英語を使う仕事につきたいから
- g. 英語圏に留学したいから
- h. 英語圏に住みたいから
- i. 外国に行くとき、英語ができるといろいろな面で役に立つから
- j. 英語のネイティブスピーカーの友だちを作りたいから
- k. ネイティブスピーカーでない外国人の友だちを作ることに役立つから
- l. 英語がわかると新聞、テレビ、ネットなどから得る情報の幅が広がるから
- m. 成績がよいと親にほめられるから
- n. 英語ができると、友達や周りの人に賞賛されるから
- o. 英語を学ぶことで母国の言語や文化、社会への理解がより深まるから
- p. 大学の専攻分野の勉強に役に立つから

質問 A の回答内訳

	5		4		3		2		1	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
a	21	17	20	26	4	9	11	4	1	3
b	16	15	19	18	16	14	6	9	0	1
c	14	10	17	22	19	19	6	4	1	1
d	21	21	28	26	6	6	2	4	0	0
e	17	20	24	22	11	6	5	8	0	1
f	12	10	13	12	15	14	11	16	6	5
g	14	11	8	10	15	16	11	10	9	10
h	9	5	8	12	12	14	17	16	11	10
i	28	22	23	30	4	3	2	2	0	0
j	10	9	19	12	14	19	11	9	3	4
k	4	5	17	15	20	24	13	8	3	4
l	17	14	30	31	5	9	3	2	2	1
m	1	1	10	17	21	11	16	22	9	6
n	0	2	4	8	22	14	18	23	13	10
o	5	8	24	28	22	16	5	5	1	1
p	8	8	19	17	14	22	15	9	1	1

質問 B：その他、あなたにとって英語を学ぶのに重要な理由があったら、具体的に書いてください。

- ・街で外国人が困っていたら、英語で話かけて助けてあげたいから。

2. 英語とその他の外国語について

(1) 英語以外の外国語の学習

a. 授業で履修しているもの

	前期	後期
中国語	28	29
フランス語	15	14
コリア語	2	2
ドイツ語	2	4
イタリア語	2	2

b. 授業外（例：語学学校、サークル、テレビの語学講座など）で学習しているもの

	前期	後期
コリア語	1	1
フランス語	0	2
イタリア語	0	1

(2) 英語以外の学習による学習意欲への影響の有無

質問 C：他の外国語も学ぶことにより、英語の意欲に変化はありましたか。

- a. 意欲がかなり高まった 3
- b. 意欲が少し高まった 12
- c. 変化はない 27
- d. 意欲が少し低下した 4
- e. 意欲がかなり低下した 0

質問 D：他の外国語も学ぶことにより、語学の学習についての考え方に変化はありましたか。

1. まったくそう思わない
2. あまりそう思わない
3. どちらともいえない
4. ややそう思う
5. かなりそう思う

- a. 英語の必要性をより強く感じるようになった
- b. 英語が好きであることを、より強く感じるようになった
- c. 自分にとって、英語よりも興味が持てる外国語が他にあると感じるようになった
- d. 将来の自分にとって、英語よりも役に立つ外国語が他にあると感じるようになった
- e. 英語だけでなく他の外国語もできると、就職に有利であると思うようになった
- f. 英語だけでなく他の外国語もできると、専攻分野の勉強に役に立つと思うようになった
- g. 語学学習全般について、意欲が高まった
- h. 語学学習全般について、重要性をより強く感じるようになった

質問Dの回答内訳

	5		4		3		2		1	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
a	5	10	11	18	19	14	9	5	1	1
b	6	8	10	7	16	22	12	9	2	2
c	4	3	19	12	12	18	7	12	4	3
d	1	2	6	2	21	22	15	18	3	4
e	11	7	17	22	11	9	6	10	1	0
f	3	4	11	12	14	20	13	9	5	3
g	12	9	18	20	10	15	4	2	2	2
h	13	13	18	19	10	14	4	2	1	0

質問E：その他、英語以外の外国語を学ぶことで「自分の意識や行動が変化した。」と思われることがありましたら、具体的に書いてください。

<回答例>

- ・日本語以外の言語や文化を学ぶことに興味・関心を持った。
- ・フランス語圏に留学したいと思うようになった。
- ・フランス語やイタリア語を学びその国に興味を持つようになった。フランス語の音楽や映画を見るようになった。
- ・ハングルを学ぶようになりその国の料理に興味をわいた。

3. 外国語学習における今後の展望

質問F：大学卒業時の自分は、外国語の習熟度についてどのような目標を持っていますか。具体的に書いてください。(例：英語はOOテストでxx点のスコアを取得している。中国語はOO検定xx級に合格している。ドイツ語でOOができるようになっている。)

<回答例>

- ・英語で外国人から話しかけられたとき、困らない程度必要最低限のことを聞き取り、答えられるようになっている。

- ・英字新聞や本を読めるようになっている。
- ・TOEIC (600～900点台)
- ・TOEIC750
- ・TOEIC 800
- ・TOEIC900
- ・英検準一級
- ・中国語で簡単な会話
- ・韓国語で簡単な会話
- ・仕事に活用できるように、スピーキングだけでなくライティングの技術も高めたい。
- ・仏語検定3級は取りたい。
- ・英語字幕なしで映画の半分以上が理解できる。
- ・ハングルは書けるように、日常会話

質問G：10年後、社会人としての「理想の自分」は、英語や他の外国語を仕事や日々の生活にどのように生かしていると思いますか。具体的に書いてください。

<回答例>

- ・幼稚園教諭になりたい。絵本でも日本と海外の物ではニュアンスがどう違うのか感じ取りたい。
- ・仕事で使える(会話、資料を読む)
- ・栄養学専攻なので将来仕事で使うかどうかわからない。しかし海外のニュースなどの情報を英語で知りたい。
- ・海外生活に困らない程度の英語
- ・趣味として洋楽、洋画
- ・英語を仕事に使うこともよいが、英語を教える立場もよいと思った、趣味として英語を勉強していきたい。
- ・旅行業界に興味がある。添乗員などしたい。視野を広げるため、海外のニュースを読むことに他言語を使っていくと思う。